



平成21年4月20日
卓話『生命論パラダイムの文明へ』
多摩大学大学院教授
シンクタンク・ソフィアバンク代表
田坂 広志 様



先日、ダボス会議に出席しましたが、あるセッションで、アメリカのキリスト教の牧師が語ったことが印象的でした。「毎朝、テレビでは、この経済危機はいつ終わるのかと問うている。しかし、我々が本当に問うべきは、この危機がいつ終わるかではなく、この危機が我々をどう変えるかだ。」さすがに宗教者、深い洞察的な発言だと思います。その意味で、今日は、我々の文明は、いまどこに向かっているのかということを話したいと思います。

しかし、文明の未来といったことは、通常の統計的な調査や予測をやっても分かりません。その答えを知るために有効なのは、むしろ哲学だと思います。特に、弁証法という哲学は、未来を予見するのに役に立ちます。この弁証法を、私は、最近上梓した『未来を予見する「5つの法則」』(光文社)の中で、「5つの法則」にまとめていますが、今日はそのうち2つを紹介します。

第1が「事物の螺旋的発展の法則」です。これは世の中の進歩、発展は右肩上がり一直線ではなく螺旋階段を登るように起こるという法則。すなわち、横から見ると上に登っているが、上から見ると一周回って元の所に戻ってくる。ただし、必ず一段上がっている。言葉を換えれば、古く懐かしいものが、新たな価値を伴って復活してくる、という法則です。具体例を申し上げると、インターネット革命。皆さんがあなたが日々使っているEメールは手紙の復活です。ただし一段上がっていますから、昔の手紙と違って、Eメールは、ブラジルの人からも瞬時に返事がくる。数百人相手に同時にメールを出すこともできるわけです。第2が、「対立物の相互浸透の法則」。対立し競合しているもの同士は互いに似てくるという法則です。例えば、資本主義と社会主義。資本主義は社会主義から社会福祉政策を学んだがゆえに発展した。一方、中国やロシアなどの社会主義は資本主義から市場原理を取り入れながら、存続している。

では、この弁証法に基づいて文明の未来を予見すると何が見えるか。螺旋的発展の法則に基づけば、昔の古い文明の中にあった価値観が復活してくる。それは「生命論パラダイム」と呼ばれるものです。では、古い生命論パラダイムが復活してくるとき、いかなる「新たな形」で復活してくるのか。その新たな形は3つあります。第1に、科学の最先端で生命論パラダイムが復活しています。それは、「複雑

系科学」と呼ばれるもの。物事が複雑になってくると、あたかも生命を持っているかのような挙動を示します。例えば、自己組織化や創発という現象。外から働きかけなくとも、自然に秩序が生まれてくる現象です。第2は、技術の最先端で、生命論パラダイムを強める動きが生まれています。インターネット革命です。インターネット革命の本質は、単なる効率化や合理化ではありません。この革命は、企業や市場や社会などのシステムの内部での相互連関性を高め、これらのシステムを高度な複雑系にしていきます。そして、複雑系とは、「生命的システム」のこと。インターネット革命は、企業や市場や社会を、高度な生命的システムに変えていくのです。そのため、我々は、インターネットを使うと、「コミュニティの自己組織化」や「知識の創発」など、自然に「生命論的な智恵」を身につけていきます。第3は、地球環境問題。この時代に最も注目されている科学理論は「ガイア理論」です。これはジェームズ・ラブロックというイギリスの学者が提唱し、世界中に大きな影響を与えた理論ですが、「地球は巨大な生命体である」という思想です。たしかに、地球とは、最も高度な複雑系であり、生命的システムです。そして、こうした理論が生まれてくることは、まさに弁証法に他なりません。なぜなら、地球が生命体であるとの思想は、ある意味で、古い「アニミズム」の復活であり、螺旋的発展だからです。そして、ガイア理論とは、これまで我々が対立概念だと考えていた科学と宗教の融合もあります。すなわち、相互浸透もある。こうしたガイア思想の延長には、21世紀、科学と宗教が融合した新たな知のパラダイムが生まれてくるのでしょうか。

さて、このように新たな次元での生命論パラダイムが復活するとき、我々に求められるのは何か。それは、「生命的なシステムに処する智恵」です。では、その智恵は、どこにあるか。それは、実は、足下にある。どの国においても古い文明の中には生命論的な智恵があります。例えば、アメリカ・インディアンの中で古く語り継がれている「土地とは、子孫から借りているものだ」という言葉。これは、まさに、





世界が学ぶべき生命論的な智恵でしょう。我々は、自分の国に古くから語り継がれている神話や伝説や寓話を、未開の思想として一笑に付すべきではない。そこには、深い生命論的な智恵が宿っているのです。そのことに、我々は気がつくべきでしょう。

では、人類全体として見たとき「古い文明」とは何か。それは、世界の歴史を振り返れば分かります。世界の歴史は、四大文明から始まりましたが、これら四大文明のすべてが「東洋」から生まれています。そして、その文明の中心が「西洋」に移り、素晴らしい科学技術、資本主義、社会システムを開花させてきたのです。従って、弁証法に基づくならば、これから人類の文明は、まず最初に、東洋文明への螺旋的回帰が起こるでしょう。そして、その後、東洋文明と西洋文明の相互浸透が起こり、二つの文明が融合した新たな文明が生まれてくるでしょう。では、いかなる国が、この東洋と西洋の文明の融合を牽引していくのか。それは、西洋文明が開花させた科学技術、資本主義の最先端を取り入れながら、同時に、その足下に、東洋文明が育んできた深い叡智、精神、思想を抱いている国でしょう。すなわち、この日本という国こそが、その東洋文明と西洋文明の融合を牽引していくことのできる国なのです。我々は、この日本という国の、その歴史的役割を自覚すべきでしょう。しかし、これは狭隘なナショナリズムを申し上げているのではありません。日本という国の歴史的使命、ミッションを申し上げているのです。なぜなら、いま、この日本という国は、世界で最も恵まれた国だからです。60年以上戦争の無い平和な国。世界第二位の経済大国。科学技術は最先端。高齢社会が悩みとなるほど誰もが健康で長寿。国民の多くが高等教育を受けられる国。いま、世界の70億の人々の中で、どれほどの人々が、この恵まれた条件の国に生きているか。そのことを考えるならば、この日本という国は、世界に恩返しをするべき時代を迎えていたのでしょう。その世界への貢献は、単なる経済的な貢献ではない。この国に古くからある生命論的な智恵、価値観を、最先端の科学技術や資本主義と結びつけ、世界に届けていく。そのことこそが、いま、我々日本人に与えられている歴史的使命と思います。

そして、そのような目で見るならば、この日本という国が古くから育んできた価値観は、不思議なことに、人類社会がこれから取り組むであろう価値観のパラダイム転換を先取りしているのです。それは、5つの価値観のパラダイム転換です。第1は、「無限」から「有限」へのパラダイム転換。いま、地球環境問題と温暖化問題によって、人類は、地球がどれほど有限の空間であるかを思い知らされています。しかし、日本という国には、昔から、有限の空間においてどう生きるかを考え続けてきた文化があります。第2は、「不变」から「無常」へ。現代の人類社会においては、非常に加速された変化が起こるため、

価値観の急速な変転に悩まされています。しかし、日本という国には、様々な価値観が変転することを前提にした「無常観」と呼びべき成熟した文化があります。第3は、「対立」から「包摶」へ。いま、人類社会は、イデオロギーの時代からコスモロジーの時代に向かっています。すなわち、多様な価値観が互いを排除せず、互いに包摶し、受け入れていくという時代に向かっています。しかし、日本という国には、昔から「八百万の神」や「大乗」という言葉に象徴されるように、様々な価値観をそのまま受け入れる文化があります。第4が、「征服」から「自然」へ。いま、地球環境問題の中で、人類社会は、自然を「管理」「制御」するのではなく、自然と「共生」するという価値観を重視し始めています。しかし、そもそも、日本という国は、自然を「征服」しようと思ったことのない国です。「共生」という言葉すら使わない。なぜなら、「共生」とは、まだ自と他が分離しているからです。日本の国にある本当の文化は「自然の思想」であり、自然と自分は一体だという「自他一体」の文化です。これから人類社会において、「共生」という思想の先にやってくるのは「自然」の思想でしょう。そして、第5は、「効率」から「意味」へ。機械論パラダイムは「効率」を重視しますが、生命論パラダイムにおいては物事の「意味」を大切にします。例えば、日本人は、人生において問題に直面したとき、その問題をどのようにして解決するかを考えるだけでなく、こうした問題が起こったのには何か深い意味があるのではないかと考えます。ときに、人生における挫折さえも、「天の配剤」として、そこから謙虚に学んでいく。日本には、そういう深みある成熟した文化があります。その意味では、人類社会が、いま深刻な地球環境問題に直面しているのは、なぜか。人類の歴史というスケールで見ると、そこには、どのような意味があるのか。そのことを考えるべきでしょう。

「起こること、すべて良きこと」。この日本という国には、そうした言葉で人生の意味を解釈していく深い思想があります。人生の問題や課題と格闘し、悪戦苦闘しながらも、一つ一つの困難や苦労、出来事から何かを深く学んでいく力が、我々日本人にはある。されば、いま人類社会が直面している大きな困難において、我々は、その思想を深く抱くべきではないか。もとより、温暖化ガスの排出を削減すべきことは自明ですが、いずれ何かの危機はやってくる。その危機を恐れ、嘆くのではなく、その危機からこそ、人類が大切な何かを学んでいく。そして、人類社会の文明は、より成熟した文明に向かっていく。我々は、そのターニングポイントに立っているのでしょうか。

これから、我々人類社会が向かうのは「生命論パラダイムの文明」。我々一人一人が、この国が育んできた「生命論的な智恵」、素晴らしい文化、思想、精神を見つめなおすべき時代を迎えていたのです。そのことを申し上げて、私の話の締めくくりとさせていただきます。ありがとうございました。